

第1章 医薬品に共通する特性と基本的な知識

問1

医薬品の本質に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 医療用医薬品と比較すればリスクは相対的に低いと考えられる一般用医薬品であっても、科学的な根拠に基づく適切な理解や判断によって適正な使用が図られる必要がある。
- b 医薬品は、人の生命や健康に密接に関連するものであり、高い水準で均一な品質が保証されているので、市販後に、承認基準が見直されることはない。
- c 医薬品は、人の疾病の診断、治療若しくは予防に使用されること、又は人の身体の構造や機能に影響を及ぼすことを目的とする生命関連製品であり、その有用性が認められたものである。
- d 医薬品が人体に及ぼす作用は複雑、かつ、多岐に渡っているが、そのすべてが解明されている。

1 (a, c) 2 (b, c) 3 (b, d) 4 (a, d)

問2

医薬品の本質に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品は、人体にとって異物（外来物）ではない。
- b 検査薬は、検査結果について正しい解釈や判断がなされなければ医療機関を受診して適切な治療を受ける機会を失うおそれがあるなど、人の健康に影響を与えるものである。
- c 医薬品医療機器等法では、健康被害の発生の可能性の有無にかかわらず、医薬品に異物等の混入、変質等があってはならない旨が定められている。
- d 一般用医薬品は、一般の生活者が自ら選択し、使用するものであるが、一般の生活者においては、添付文書や製品表示に記載された内容を見ただけでは、効能効果や副作用等について誤解や認識不足を生じることもある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問3

医薬品のリスク評価に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品の効果とリスクは、薬物暴露時間と暴露量との和で表現される用量 - 反応関係に基づいて評価される。
- b 治療量を超えた量を単回投与する場合に、毒性が発現するおそれが高くなるが、投与量が少量であれば長期投与された場合でも、毒性が発現することはない。
- c 動物実験で求められる50%致死量(LD50)は、薬物の有効性の指標として用いられる。
- d 医薬品に対しては、製造販売後の調査及び試験の実施基準として Good Vigilance Practice (GVP) が制定されている。

	a	b	c	d
1	誤	誤	誤	正
2	誤	誤	正	誤
3	誤	正	誤	誤
4	正	誤	誤	誤
5	誤	誤	誤	誤

問4

医薬品の副作用に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 医薬品を使用してアレルギー(過敏反応)を起こしたことがある人は、その原因となった医薬品に対して免疫ができているため、次回から使用しても問題はない。
- b アレルギーには体質的・遺伝的な要素があり、アレルギーを起こしやすい体質の人や、近い親族にアレルギー体質の人がいる場合には、注意が必要である。
- c アレルギーを引き起こす原因物質をアナフィラキシーという。
- d 一般用医薬品は、通常は、その使用を中断することによる不利益よりも、重大な副作用を回避するが優先され、その兆候が現れたときは基本的に使用を中止することとされている。

- 1 (a, b) 2 (a, c) 3 (b, d) 4 (c, d)

問5

医薬品と食品に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 外用薬や注射薬であれば、食品によって医薬品の作用や代謝に影響を受けることはない。
- b カフェインを主薬とする眠気防止薬は、お茶と同時に服用すると循環器系に作用が強く現れる場合がある。
- c アルコールは、主として腎臓で代謝されるため、酒類（アルコール）をよく摂取する者では、その代謝機能が高まっていることが多い。
- d 生薬成分等については、医薬品的な効能効果が標榜^{ほう}又は暗示されていなければ、食品（ハーブ等）として流通可能なものもある。

- 1 (a, b) 2 (a, c) 3 (b, d) 4 (c, d)

問6

医薬品の品質に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品に配合されている成分の中には、適切な保管・陳列がなされなければ、医薬品の効き目が低下したり、人体に好ましくない作用をもたらす物質を生じるものがある。
- b 医薬品は、適切な保管・陳列がなされたとしても、経時変化による品質の劣化は避けられない。
- c 品質が承認等された基準に適合しない医薬品、その全部又は一部が変質・変敗した物質から成っている医薬品の販売は禁止されている。
- d 外箱等に表示されている「使用期限」は、開封・未開封を問わず、製品の品質が保持される期限である。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問7

薬剤師や登録販売者が、一般用医薬品の購入者に対して行う説明に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 1回1錠の用量が定められた医薬品であったが、症状を早く改善させる必要があったので、他の医薬品を使用していないことを確認した上で、倍量を服用するよう伝えた。
- b 一般用医薬品を使用する前には、添付文書や製品表示を読む必要があると伝えた。
- c 一般用医薬品を使用して、腹痛を一時的に緩和するだけの対処を漫然と続けていたので、医療機関への受診を勧めた。
- d 小児への使用を避けるべき医薬品であるが、症状等を十分に聞いた上で、大人用のものを半量なら飲ませてもよいと伝えた。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問8

医薬品の相互作用に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品を他の医薬品と併用した場合に、同様な作用をもつ成分が重複することがあるが、これにより、作用が強くなり出過ぎたり、副作用を招く危険性が増すことはない。
- b 副作用や相互作用のリスクを減らす観点から、緩和を図りたい症状が明確である場合には、なるべくその症状に合った成分のみが配合された医薬品が選択されることが望ましい。
- c 医療機関で治療を受けている場合には、一般用医薬品を併用しても問題ないかどうかについては、治療を行っている医師又は歯科医師若しくは処方された医薬品を調剤する薬剤師に確認する必要がある。
- d 他の医薬品や食品との相互作用は、医薬品が吸収、代謝（体内で化学的に変化すること）される過程で起き、分布又は排泄される過程では起こらない。

- 1 (a, b) 2 (b, c) 3 (c, d) 4 (a, d)

問9

小児への医薬品の使用に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 小児は、大人と比べて血液脳関門が未発達であるため、吸収されて循環血液中に移行した医薬品の成分が脳に達しにくい。
- 2 小児は、医薬品の成分の代謝・排泄に時間がかかり、作用が強く出過ぎたり、副作用がより強く出ることがある。
- 3 医薬品によっては、形状等が小児向けに作られていないため小児に対して使用しないことなどの注意を促している場合もある。
- 4 5歳未満の幼児に使用される錠剤やカプセル剤などの医薬品では、服用時に喉につかえやすいので注意するよう添付文書に記載されている。

問10

高齢者への医薬品の使用に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品の使用上の注意等において「高齢者」という場合には、おおよその目安として65歳以上を指す。
- b 高齢者は、持病（基礎疾患）を抱えていることが多く、一般用医薬品の使用によって基礎疾患の症状が悪化したり、治療の妨げとなる場合がある。
- c 高齢者では、一般用医薬品を使用する場合は、定められた用量よりも少ない用量から様子を見ながら使用しなければならない。
- d 高齢者では、手先の衰えのため医薬品を容器や包装から取り出すことが難しい場合や、医薬品の取り違えや飲み忘れを起こしやすいなどの傾向がある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問 11

妊婦・授乳婦等への医薬品の使用に関する記述について、正しいものはどれか。

- 1 ビタミン A 含有製剤は、妊娠前後の一定期間に通常の用量を超えて摂取すると胎児に先天異常を起こす危険性を低くすることができる。
- 2 便秘薬のように、配合成分やその用量によっては流産や早産を誘発するおそれがあるものがある。
- 3 一般用医薬品において、多くの場合、妊婦の使用の可否について明示されている。
- 4 授乳婦が医薬品を使用しても、乳汁中に移行することはなく、母乳を介して乳児が医薬品の成分を摂取することはない。

問 12

プラセボ効果（偽薬効果）に関する記述について、誤っているものはどれか。

- 1 医薬品を使用したとき、結果的又は偶発的に薬理作用によらない作用を生じることをプラセボ効果という。
- 2 プラセボ効果によってもたらされる反応や変化には、不都合なもの（副作用）はない。
- 3 医薬品は、プラセボ効果を目的として使用されるべきではない。
- 4 プラセボ効果は、医薬品を使用したこと自体による楽観的な効果への期待（暗示効果）等が関与して生じると考えられている。

問 13

セルフメディケーション及び一般用医薬品を用いた対処に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 情報提供は必ずしも医薬品の販売に結びつけるのではなく、医薬品の使用によらない対処等を勧めることが適切な場合もある。
- b セルフメディケーションの主役は、一般用医薬品の販売等に従事する専門家である。
- c 高熱や激しい腹痛がある場合など症状が重いときには、一般用医薬品を使用して症状の軽減を図るよう勧めることが適切な対処である。
- d 一般用医薬品で対処可能な範囲は、医薬品を使用する人によって変わってくるものであることに留意する必要がある。

- 1 (a, b) 2 (b, c) 3 (c, d) 4 (a, d)

問 14

医薬品の販売等に従事する専門家が購入者から確認しておきたい事項に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a その医薬品を使用する人が医療機関で治療を受けていないか。
- b その医薬品を使用する人が過去にアレルギーや医薬品による副作用等の経験があるか。
- c その医薬品を使用する人として、小児や高齢者、妊婦等が想定されるか。
- d 何のためにその医薬品を購入しようとしているか。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 15

医薬品の販売等に従事する専門家が一般用医薬品を販売する時の情報提供に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 専門家からの情報提供は、単に専門用語を分かりやすい平易な表現で説明するだけでなく、説明した内容が購入者等にどう理解され、行動に反映されているか、などの実情を把握しながら行う必要がある。
- b 購入者が医薬品を使用する状況は、随時変化する可能性があるため、販売数量は一時的に使用する必要量とする等、コミュニケーションの機会が継続的に確保できるよう配慮する。
- c 購入者側に情報提供を受けようとする意識が乏しい場合は、コミュニケーションを図る必要はない。
- d 家庭における常備薬として購入される場合には、すぐ使用されないため、情報提供を行う必要はない。

- 1 (a, b) 2 (a, c) 3 (b, d) 4 (c, d)

問 16

医療機関で治療を受けている人等への医薬品の使用に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 購入しようとする医薬品を使用することが想定される人が医療機関で治療を受けている場合には、疾患の程度やその医薬品の種類等に応じて、問題を生じるおそれがあれば使用を避けることができるよう情報提供がなされることが重要である。
- b 過去に医療機関で治療を受けていた（今は治療を受けていない）という人に対して、購入しようとする一般用医薬品について情報提供を行う場合には、どのような疾患にいつ頃かかっていたのかは、特に注意する必要はない。
- c 医療機関での治療は特に受けていない場合であっても、医薬品の種類や配合成分等によっては、特定の症状がある人が使用するとその症状を悪化させるおそれがある。
- d 心臓病の診断を受けた人がカンゾウ又はそのエキスを大量に使用した場合、むくみ（浮腫）等の症状が現れ、心臓病を悪化させるおそれがある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問 17

薬害訴訟に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a サリドマイド訴訟は、催眠鎮静剤等として販売されたサリドマイド製剤を妊娠している女性が使用したことにより、出生児に四肢欠損、耳の障害等の先天異常が発生したことに対する損害賠償訴訟である。
- b スモン訴訟とは、鎮痛剤として販売されていたキノホルム製剤を使用したことにより、亜急性脊髄視神経症に罹患したことに対する損害賠償訴訟である。
- c CJD 訴訟とは、脳外科手術等に用いられていたウシ乾燥硬膜を介してクロイツフェルト・ヤコブ病 (CJD) に罹患したことに対する損害賠償訴訟である。
- d HIV 訴訟とは、血友病患者が、ヒト免疫不全ウイルス (HIV) が混入した原料血漿から製造された血液凝固因子製剤の投与を受けたことにより、HIV に感染したことに対する損害賠償訴訟である。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 18

スモンに関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a スモンの原因となったキノホルム製剤は、米国では1960年になって、アメーバ赤痢に使用が限定された。
- b サリドマイド製剤と異なり、キノホルム製剤は、一般用医薬品として販売されていた製品ではない。
- c スモンはその症状として、激しい腹痛を伴う下痢、下半身の痺れ、歩行困難等が現れるが、麻痺が上半身に広がることはない。
- d スモン訴訟等を契機として、1979年、医薬品の副作用による健康被害の迅速な救済を図るため、医薬品副作用被害救済制度が創設された。

- 1 (a, b) 2 (b, c) 3 (c, d) 4 (a, d)

問 19

クロイツフェルト・ヤコブ病（CJD）に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a CJD は、次第に認知症に類似した症状が現れ、死に至る重篤な神経難病である。
- b CJD は、ウイルスの一種であるプリオンが脳の組織に感染することによって発症する。
- c CJD 訴訟の和解を踏まえて、CJD 患者の入院対策・在宅対策の充実が講じられるようになった。
- d CJD 訴訟を契機に医薬品等安全性情報報告制度が創設された。

1 (a、 b) 2 (a、 c) 3 (b、 d) 4 (c、 d)

問 20

副作用や薬害に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 医薬品による副作用には、眠気、口渇等の比較的良好に見られるものは含まない。
- b 医薬品の副作用は、医薬品が十分注意して使用されれば起こらないものである。
- c 副作用は、容易に異変を自覚できるものばかりでなく、血液や内臓機能への影響等のように直ちに明確な自覚症状として現れないこともある。
- d 一般用医薬品の販売等に従事する者は、薬害事件の歴史を十分に理解し、医薬品の副作用等による健康被害の拡大防止に関して、医薬品の情報提供、副作用報告等を通じて、その責務の一端を担っていることを肝に銘じておく必要がある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

第3章 主な医薬品とその作用

問 21

かぜ及びかぜ薬に関する記述について、正しいものはどれか。

- 1 かぜ薬とは、ウイルスの増殖を抑えたり、ウイルスを体内から除去することを目的として使用される医薬品の総称であり、総合感冒薬とも呼ばれる。
- 2 かぜ薬による重篤な副作用として、まれに、ショック（アナフィラキシー）、皮膚粘膜眼症候群、中毒性表皮壊死融解症、喘息、間質性肺炎が起こることがある。
- 3 インフルエンザ（流行性感冒）は、かぜと同様、ウイルスの呼吸器感染によるものであり、感染力が弱く、重症化することもない。
- 4 15歳未満の小児でインフルエンザにかかっているときは、サリチルアミドが配合されたかぜ薬を使用することが適切である。

問 22

次のうち、痰の切れを良くする目的でかぜ薬に配合される成分として、正しいものの組み合わせはどれか。

- a ブロムヘキシン塩酸塩
- b イブプロフェン
- c グアイフェネシン
- d ジフェンヒドラミン塩酸塩

- 1 (a, b) 2 (a, c) 3 (b, d) 4 (c, d)

問 23

かぜの症状緩和に用いられる漢方処方製剤のうち、構成生薬としてカンゾウを含まないものはどれか。

- 1 柴胡桂枝湯
- 2 葛根湯
- 3 半夏厚朴湯
- 4 麻黄湯
- 5 小青竜湯

問 24

一般用医薬品の解熱鎮痛薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a アセトアミノフェンは、主として中枢作用によって解熱・鎮痛をもたらすため、胃腸障害を生じやすく、空腹時に服用できる製品はない。
- b 解熱鎮痛薬は、発熱や痛みの原因となっている病気や外傷を根本的に治すことができる。
- c 月経そのものが起こる過程にプロスタグランジンが関わっていることから、月経痛（生理痛）には、解熱鎮痛薬の効果が期待できる。
- d 一般用医薬品の解熱鎮痛薬は、複数の有効成分が配合されている製品が多く、他のかぜ薬や鎮痛薬等が併用されると、同じ成分又は同種の作用を持つ成分が重複して、効き目が強く現れすぎたり、副作用が起りやすくなったりするおそれがある。

- 1 (a, b) 2 (b, c) 3 (c, d) 4 (a, d)

問 25

アスピリン（別名アセチルサリチル酸）に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a アスピリンは、他の解熱鎮痛成分と比較して胃腸障害を起こしにくいとされている。
- b アスピリンは、まれに重篤な副作用として肝機能障害を生じることがある。
- c アスピリン喘息は、アスピリン特有の副作用であり、他の解熱鎮痛成分では起こらない。
- d 医療用医薬品のアスピリンは、血栓ができやすい人に対する血栓予防薬の成分として用いられる。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	正
2	誤	正	誤	誤
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	誤	誤	正	誤

問 26

眠気防止薬に関する記述について、誤っているものはどれか。

- 1 眠気防止薬におけるカフェインの1回摂取量は、カフェインとして200mg、1日摂取量は500mgが上限とされている。
- 2 カフェインには、作用は弱いながら反復摂取により依存を形成するという性質があるため、「短期間の服用にとどめ、連用しないこと」という注意喚起がなされている。
- 3 眠気防止薬は、一時的に精神的な集中を必要とするときに、眠気や倦怠感を除去する目的で使用されるほか、疲労の解消にも効果がある。
- 4 成長期の小児の発育には睡眠が重要であることから、小児用の眠気防止薬はないが、小・中学生の試験勉強に効果があると誤解されて誤用事故を起こした事例も知られており、15歳未満の小児に使用されることがないように注意が必要である。

問 27

鎮^{うん}暈^{かん}薬（乗物酔い防止薬）に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 乗物酔い防止薬には、主として吐きけを抑えることを目的とした成分も配合されるため、つわりに伴う吐きけへの対処として使用することも推奨されている。
- b ジフェニドール塩酸塩は、緑内障の診断を受けた人では、その症状を悪化させるおそれがある。
- c ジメンヒドリナートは、ジフェンヒドラミンテオクル酸塩の一般名で、専ら乗物酔い防止薬に配合される抗ヒスタミン成分である。
- d プロメタジンテオクル酸塩等のプロメタジンを含む成分については、外国において、乳児突然死症候群や乳児睡眠時無呼吸発作のような致命的な呼吸抑制を生じたとの報告があるため、15歳未満の小児では使用を避ける必要がある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 28

小児の^{かん}疳^{かん}を適応症とする生薬製剤・漢方処方製剤（小児鎮静薬）に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 症状の原因となる体質の改善を主眼としているものが多く、比較的長期間（1ヶ月位）継続して服用されることがある。
- 2 発達段階の一時的な症状と保護者が達観することも重要であり、小児鎮静薬を保護者側の安眠等を図ることを優先して使用することは適当でない。
- 3 小児の^{かん}疳^{かん}を適応症とする主な漢方処方製剤としては、柴^{さい}胡^こ加^{かりゅうこつ}竜^{ぼれいとう}骨^{けいし}牡^{かりゅうこつ}蛎^{ぼれいとう}湯、桂^{よくかん}枝^{よくかん}加^{よくかん}陳^{かん}皮^{かん}半^{かん}夏^{かん}のほか、小^{しょう}建^{けん}中^{ちゅう}湯がある。
- 4 ジンコウは、ウシ科のサイカレイヨウ（高鼻レイヨウ）等の角を基原とする生薬で、緊張や興奮を鎮める作用を期待して用いられる。

問 29

コデインリン酸塩に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 気道の炎症を和らげることを目的として、咳止め・痰を出しやすくする薬（鎮咳去痰薬）に配合されている。
- b 長期連用や大量摂取によって倦怠感や虚脱感、多幸感等が現れることがあり、薬物依存につながるおそれがある。
- c 妊娠中に摂取された場合、吸収された成分の一部が血液 - 胎盤関門を通過して胎児へ移行することが知られている。
- d 胃腸の運動を亢進させる作用を示し、副作用として下痢が現れることがある。

- 1 (a, b) 2 (b, c) 3 (c, d) 4 (a, d)

問 30

鎮咳去痰薬に関する記述のうち、正しいものはどれか。

- 1 ノスカピン塩酸塩はモルヒネと同じ基本構造を持ち、依存性がある成分であり、麻薬性鎮咳成分とも呼ばれる。
- 2 メチルエフェドリン塩酸塩は、交感神経系を刺激して気管支を拡張させる作用を示し、呼吸を楽にして咳や喘息の症状を鎮めることを目的として用いられる。
- 3 カンゾウは、鎮咳去痰薬以外の医薬品に配合されていることもあるが、一般食品に用いられることはない。
- 4 鎮咳成分や気管支拡張成分、抗炎症成分の働きを助ける目的で、カルボシステインが配合されている場合があるが、気道粘膜での粘膜分泌を抑制するため、痰が出にくくなることがある。

問 31

うがい薬（含嗽薬）に関する記述について、誤っているものはどれか。

- 1 含嗽薬は、水で用時希釈又は溶解して使用するものが多いが、調製した濃度が濃すぎても薄すぎても効果が十分得られない。
- 2 含嗽薬の使用後すぐに食事を摂ると、殺菌消毒効果が薄れやすい。
- 3 リゾチーム塩酸塩は、口腔内や喉に付着した細菌等の微生物を死滅させたり、その増殖を抑えることを目的として用いられる。
- 4 ポビドンヨードが配合された含嗽薬では、その使用によって銀を含有する歯科材料（義歯等）が変色することがある。

問 32

胃に作用する薬の配合成分とその主な作用、目的との関係のうち、正しいものはどれか。

	(配合成分)		(主な作用、目的)
1	センブリ	—	胃粘膜を覆って胃液による消化から保護する、荒れた胃粘膜の修復を促す。
2	スクラルファート	—	消化管内容物中に発生した気泡の分離を促す。
3	ピレンゼピン塩酸塩	—	炭水化物、脂質、タンパク質、繊維質等の分解に働く酵素を補う。
4	酸化マグネシウム	—	中和反応によって胃酸の働きを弱める。

問 33

胃腸の薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品には、様々な胃腸の症状に幅広く対応できるよう、制酸、胃粘膜保護、健胃、消化、整腸、鎮痛鎮痙、消泡等、それぞれの作用を目的とする成分を組み合わせた製品（いわゆる総合胃腸薬）があるため、消化不良、胃痛、胸やけなど症状がはっきりしている場合であっても、総合胃腸薬を選択することが望ましい。
- b オウレンのような苦みのある生薬成分を含む健胃薬は、散剤をオブラートで包む等、味や香りを遮蔽する方法で服用することが適当である。
- c 制酸成分を主体とする胃腸薬については、酸度の高い食品と一緒に使用すると胃酸に対する中和作用が低下することが考えられるため、炭酸飲料等での服用は適当でない。
- d 健胃薬、消化薬、整腸薬又はそれらの目的を併せ持つものには、医薬部外品として製造販売されている製品もあるが、それらは人体に対する作用が緩和なものとして、配合できる成分やその上限量が定められており、また、効能・効果の範囲も限定されている。

- 1 (a, b) 2 (a, c) 3 (b, d) 4 (c, d)

問 34

止瀉薬に関する記述について、正しいものはどれか。

- 1 オウバクは、収斂作用のほか、抗菌作用、抗炎症作用も期待して用いられる。
- 2 木クレオソートは、腸管内の異常発酵等によって生じた有害な物質を吸着させることを目的として用いられる。
- 3 ロペラミド塩酸塩が配合された止瀉薬は、食べすぎ・飲みすぎによる下痢、寝冷えによる下痢のほか、食あたりや水あたりによる下痢の症状を鎮めることを目的として用いられる。
- 4 次没食子酸ビスマスは、細菌感染による下痢の症状を鎮めることを目的として用いられる。

問 35

瀉下薬に関する記述について、誤っているものはどれか。

- 1 ヒマシ油は、防虫剤や殺鼠剤を誤って飲み込んだ場合など、脂溶性の物質をすみやかに体外に排除させなければならない場合に用いられる。
- 2 センナ及びセンノシドが配合された瀉下薬については、妊婦又は妊娠していると思われる女性では、使用を避けるべきである。
- 3 マルツエキスは、瀉下薬としては比較的作用が穏やかなため、主に乳幼児の便秘に用いられる。
- 4 ビサコジルが配合された内服薬では、胃内で分解されて効果が低下したり、胃粘膜に無用な刺激をもたらすのを避けるため、腸内で溶けるようにコーティング等されている製品（腸溶性製剤）が多い。

問 36

胃腸鎮痛鎮痙薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 抗コリン作用を示すアルカロイドを豊富に含む生薬成分として、ロートエキス（ロートコン（ナス科のハシリドコロ又はチョウセンハシリドコロの根茎及び根を基原とする生薬）の抽出物）が用いられることが多い。
- b ロートエキスは、吸収された成分が母乳中に移行することはないが、メチルオクタトロピン臭化物は、吸収された成分の一部が母乳中に移行することが知られている。
- c パパベリン塩酸塩は、抗コリン成分と異なり自律神経系を介した作用ではないため、眼圧を上昇させる作用はない。
- d オキセサゼインは、妊娠中や小児における安全性は確立されておらず、妊婦又は妊娠していると思われる女性、15歳未満の小児では、使用を避けることとされている。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 37

浣腸薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 繰り返し使用すると直腸の感受性が高くなり、効果が増強される。
- b 浣腸薬は一般に、直腸の急激な動きに刺激されて流産・早産を誘発するおそれがあるため、妊婦又は妊娠していると思われる女性では使用を避けるべきである。
- c 腹痛が著しい場合や便秘に伴って吐きけや嘔吐が現れた場合には、急性腹症（腸管の狭窄、閉塞、腹腔内器官の炎症等）の可能性があり、浣腸薬の配合成分によってその症状を悪化させるおそれがある。
- d グリセリンが配合された浣腸薬を、肛門や直腸の粘膜に損傷があり出血しているときに使用すると、グリセリンが傷口から血管内に入って、赤血球の破壊（溶血）を引き起こすおそれがある。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 38

強心薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 一般用医薬品において、センソは1日用量が5mg以下となるよう用法・用量が定められており、それに従って適正に使用される必要がある。なお、通常用量においても、悪心（吐きけ）、嘔吐の副作用が現れることがある。
- b センソが配合された丸薬、錠剤等の内服固形製剤は、口中でよく噛み砕いて服用することとされている。
- c ゴオウは、ウシ科のウシの胆嚢中に生じた結石を基原とする生薬で、強心作用のほか、末梢血管の拡張による血圧降下、興奮を鎮める等の作用があるとされている。
- d ロクジョウは、ウグイスガイ科のアコヤガイ、シンジュガイ又はクロチョウガイ等の外套膜組成中に病的に形成された顆粒状物質を基原とする生薬で、鎮静作用等を期待して用いられる。

- 1 (a, c) 2 (b, c) 3 (b, d) 4 (a, d)

問 39

高コレステロール改善薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a ポリエンホスファチジルコリンは、コレステロールと結合して、代謝されやすいコレステロールエステルを形成するとされ、肝臓におけるコレステロールの代謝を促す効果を期待して用いられる。
- b ビタミン B2 には、コレステロールの生合成抑制と排泄・異化促進作用、中性脂肪抑制作用、過酸化脂質分解作用を有すると言われている。
- c パンテチンは、コレステロールから過酸化脂質の生成を抑えるほか、末梢血管における血行を促進する作用があるとされ、血中コレステロール異常を伴う末梢血行障害（手足の冷え、痺れ）の緩和等を目的として用いられる。
- d 高コレステロール改善薬は、結果的に生活習慣病の予防につながるものであるが、ウエスト周囲径（腹囲）を減少させるなどの瘦身効果を目的とする医薬品ではない。医薬品の販売等に従事する専門家においては、購入者等に対してその旨を説明する等、正しい理解を促すことが重要である。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 40

貧血用薬（鉄製剤）に関する記述について、正しいものはどれか。

- 1 鉄製剤を服用することにより、便が白くなることがある。
- 2 鉄分の吸収は空腹時のほうが高いとされているが、消化器系への副作用を軽減するには、食後に服用することが望ましい。
- 3 鉄製剤の服用の前後 30 分にタンニン酸を含む飲食物（緑茶、紅茶、コーヒー、ワイン、柿等）を摂取すると、タンニン酸と反応して鉄の吸収が良くなるので、鉄製剤の服用前後にこれらの飲食物を積極的に摂取することが望ましい。
- 4 鉄欠乏性貧血を予防するため、貧血の症状がみられる以前から継続的に鉄製剤を使用することが適当である。

問 41

痔及び痔疾用薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 直腸粘膜と皮膚の境目となる歯状線より上部の、直腸粘膜にできた痔核を内痔核と呼び、排便と関係なく、出血や患部の痛みを生じる。
- b 内用痔疾用薬は、外用痔疾用薬と併せて用いることはない。
- c 外用痔疾用薬は局所に適用されるものであるため、循環血流中には入らず、全身的な影響を生じることはない。
- d 痔の悪化等により細菌感染が起きると、異なる種類の細菌の混合感染が起こり、膿瘍や痔瘻を生じて周囲の組織に重大なダメージをもたらすことがある。

	a	b	c	d
1	正	正	誤	誤
2	誤	正	正	誤
3	誤	誤	正	正
4	誤	誤	誤	正
5	正	誤	誤	誤

問 42

外用痔疾用薬に配合される成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a リドカインが配合された坐剤及び注入軟膏では、まれに重篤な副作用としてショック（アナフィラキシー）を生じることがある。
- b 局所への穏やかな刺激によって痒みを抑える効果を期待して、熱感刺激を生じさせるメントールが配合されている場合がある。
- c 痔による肛門部の創傷の治癒を促す効果を期待して、アラントインが用いられる。
- d 粘膜表面に不溶性の膜を形成することによる、粘膜の保護・止血を目的として、テトラヒドロゾリン塩酸塩が配合されている場合がある。

- 1 (a, b) 2 (a, c) 3 (b, d) 4 (c, d)

問 43

婦人薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 妊娠中の女性ホルモン成分の摂取によって胎児の先天性異常の発生が報告されており、妊婦又は妊娠していると思われる女性では使用を避ける必要がある。
- b 医師の治療を受けている人では、婦人薬を使用する前に、その適否につき、治療を行っている医師又は処方薬の調剤を行った薬剤師に相談がなされるべきである。
- c エチニルエストラジオール、エストラジオールを含有する婦人薬は、内服薬のみが認められている。
- d 内服で用いられる婦人薬は、比較的作用が穏やかで、ある程度長期間使用することによって効果が得られるとされる。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	誤	正	正
3	誤	正	誤	正
4	正	誤	正	誤
5	正	正	誤	正

問 44

第 1 欄の記述は、婦人薬として用いられる漢方処方製剤に関するものである。該当する漢方処方製剤は第 2 欄のどれか。

第 1 欄

体力中等度又はやや虚弱で冷えがあるものの胃腸炎、腰痛、神経痛、関節痛、月経痛、頭痛、更年期障害、感冒に適すとされるが、体の虚弱な人（体力が衰えている人、体の弱い人）、胃腸の弱い人、発汗傾向の著しい人では、不向きとされる。構成生薬としてマオウを含む。

第 2 欄

- 1 五積散 ごしゃくさん
- 2 酸棗仁湯 さんそうにんとう
- 3 白虎加人參湯 びやっこかにんじんとう
- 4 桃核承気湯 とうかくじょうきとう
- 5 加味逍遙散 かみしやうようさん

問 45

次のうち、ステロイド性抗炎症成分として正しいものの組み合わせはどれか。

- a デキサメタゾン
- b ケトプロフェン
- c ヒドロコルチゾン酢酸エステル
- d ピロキシカム

- 1 (a、c) 2 (b、c) 3 (b、d) 4 (a、d)

問 46

アレルギー用薬に関する記述について、誤っているものはどれか。

- 1 メキタジンは、まれに重篤な副作用としてショック（アナフィラキシー）、肝機能障害、血小板減少を生じることがある。
- 2 皮膚や鼻粘膜の炎症を和らげることを目的として、生薬成分であるコウカが用いられることがある。
- 3 プソイドエフェドリン塩酸塩は、心臓病、高血圧、糖尿病又は甲状腺機能障害の診断を受けた人、前立腺肥大による排尿困難の症状がある人では、症状を悪化させるおそれがあり、使用を避ける必要がある。
- 4 ベラドンナはナス科の草本で、その葉や根に、副交感神経系の働きを抑える作用を示すアルカロイドを含む。

問 47

アレルギー及びアレルギー用薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 内服のアレルギー用薬と外用のアレルギー用薬は、配合成分に同じ成分が重複することがあるが、投与経路が違うので、併用しても特に問題はない。
- b 一般用医薬品には、アトピー性皮膚炎による慢性湿疹等の治療に用いることを目的とするものはないことから、アトピー性皮膚炎が疑われる場合やその診断が確定している場合は、医師の受診を勧めることが重要である。
- c 医薬品が原因となってアレルギー症状を生じることがあり、使用中に症状が悪化・拡大したような場合には、医薬品の副作用である可能性を考慮し、その医薬品の服用を中止して、医療機関を受診するなどの対応が必要である。
- d 鼻炎症状はかぜの随伴症状として現れることも多いが、高熱を伴っている場合には、医療機関を受診するなどの対応が必要である。

	a	b	c	d
1	正	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	正
4	誤	正	正	正
5	正	正	正	正

問 48

鼻に用いる薬に配合される成分に関する記述のうち、誤っているものはどれか。

- 1 アドレナリン作動成分が配合された点鼻薬は、過度に使用されると鼻粘膜の血管が反応しなくなり、逆に血管が拡張して二次充血を招き、鼻づまり（鼻閉）がひどくなりやすい。
- 2 クロモグリク酸ナトリウムは、アレルギー性でない鼻炎や副鼻腔炎に対しては効果がない。
- 3 ベンザルコニウム塩化物は、黄色ブドウ球菌、溶血性連鎖球菌又はカンジダ等の真菌類に対する殺菌消毒作用を示すほか、結核菌やウイルスにも効果を示す。
- 4 リドカインは、鼻粘膜の過敏性や痛みや痒みを抑えることを目的として配合されている場合がある。

問 49

次の表は、ある点眼薬に配合されている成分の一部である。この医薬品に含まれる成分に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

100mL 中	
ピリドキシン塩酸塩	0.04g
テトラヒドロゾリン塩酸塩	0.01g
ネオスチグミンメチル硫酸塩	0.005g
イブシロン-アミノカプロン酸	2.0g

- a ピリドキシン塩酸塩は、末梢の微小循環を促進させることにより、結膜充血、疲れ目等の症状を改善する効果を期待して配合される。
- b テトラヒドロゾリン塩酸塩は、結膜を通っている血管を収縮させて目の充血を除去することを目的として配合されている。
- c ネオスチグミンメチル硫酸塩は、目の^{かゆ}痒みを和らげることを目的として配合されている。
- d イブシロン-アミノカプロン酸は、炎症の原因となる物質の生成を抑える作用を示し、目の炎症を改善する効果を期待して配合されている。

- 1 (a, c) 2 (b, c) 3 (b, d) 4 (a, d)

問 50

点眼薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 一度に何滴も点眼しても効果が増すわけではなく、むしろ鼻粘膜や喉から吸収されて、副作用を起こしやすくなる。
- b 点眼後は、数秒間、眼^{けん}瞼（まぶた）を閉じて、薬液を結膜^{のう}囊内に行き渡らせる。その際、目尻を押さえると、薬液が鼻^{くう}腔内へ流れ込むのを防ぐことができ、効果的とされる。
- c 点眼薬は通常、無菌的に製造されており、別の人と共用しても問題ない。
- d ソフトコンタクトレンズは水分を含みやすく、防腐剤などの配合成分がレンズに吸着されて、角膜に障害を引き起こす原因となるおそれがある。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 51

皮膚に用いる薬に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 外皮用薬は、表皮の角質層が柔らかくなることで有効成分が浸透しやすくなることから、入浴後に用いるのが効果的とされる。
- b 非ステロイド性抗炎症成分であるインドメタシンには、殺菌作用はないため、皮膚感染症に対しては効果がなく、痛みや腫れを鎮めることでかえって皮膚感染が自覚されにくくなる（不顕性化する）おそれがある。
- c 湿疹とみずむし等の初期症状は類似していることが多く、湿疹に抗真菌作用を有する成分を使用すると、かえって湿疹の悪化を招くことがある。
- d ぜにたむしやいんきんたむしで患部が広範囲に及ぶ場合でも外皮用薬の使用のみで十分であり、医療機関（皮膚科）における全身的な治療（内服抗真菌薬の処方）を必要とする場合はない。

	a	b	c	d
1	誤	誤	正	正
2	正	誤	誤	正
3	正	正	誤	誤
4	正	正	正	誤
5	誤	正	正	正

問 52

歯槽膿漏薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 炎症を起こした歯周組織からの出血を抑える作用を期待して、ビタミン E が配合されている場合がある。
- b 炎症を起こした歯周組織の修復を促す作用のほか、歯肉炎に伴う口臭を抑える効果も期待して、銅クロロフィリンナトリウムが配合されている場合がある。
- c ステロイド性抗炎症成分の含有量が少ない場合には、長期連用を避ける必要はない。
- d 殺菌消毒作用のほか、抗炎症作用なども期待して、ヒノキチオールやチョウジ油（フトモモ科のチョウジの蕾又は葉を水蒸気蒸留して得た精油）が配合されている場合もある。

- 1 (a, c) 2 (b, c) 3 (b, d) 4 (a, d)

問 53

禁煙補助剤に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a 咀嚼^{そしゃく}剤は、大量に使用しても禁煙達成が早まるものでなく、かえってニコチン過剰摂取による副作用のおそれがある。
- b 咀嚼^{そしゃく}剤は、菓子のガムのように噛^かみ、唾液を多く分泌させながら使用することが望ましいとされている。
- c うつ病と診断されたことのある人では、禁煙時の離脱症状により、うつ症状を悪化させることがあるため、使用を避ける必要がある。
- d ニコチンは、交感神経系を興奮させる作用を示し、アドレナリン作動成分が配合された医薬品（鎮咳^{がい}去痰^{たん}薬、鼻炎用薬、痔疾^じ用薬等）との併用により、その作用を増強させるおそれがある。

	a	b	c	d
1	誤	正	正	誤
2	正	正	誤	正
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	正	誤	正	正

問 54

第1欄の記述は、ビタミンに関するものである。該当するビタミンは第2欄のどれか。

第1欄

赤血球の形成を助け、また、神経機能を正常に保つために重要な栄養素である。シアノコバラミン、ヒドロキソコバラミン塩酸塩等として、ビタミン主薬製剤、貧血用薬等に配合されている。

第2欄

- 1 ビタミン B1
- 2 ビタミン B6
- 3 ビタミン B12
- 4 ビタミン D
- 5 ビタミン E

問 55

滋養強壯保健薬に用いられる成分とその作用について、正しいものの組み合わせはどれか。

	(成分)		(作用)
a	グルクロノラクトン	—	軟骨成分を形成及び修復する。
b	アスパラギン酸ナトリウム	—	骨格筋の疲労の原因となる乳酸の分解を促す。
c	ヘスペリジン	—	ビタミン C の吸収を助ける。
d	アミノエチルスルホン酸 (タウリン)	—	皮膚の新陳代謝を活発にしてメラニンの排出を促す。

- 1 (a、 b) 2 (b、 c) 3 (c、 d) 4 (a、 d)

問 56

漢方処方製剤及び生薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 漢方処方製剤を使用する場合、漢方独自の病態である「証」に基づいて用いることが、有効性を確保するために重要である。
- b 「証」に適さない漢方処方製剤が使用された場合であっても、症状の悪化や副作用を引き起こすことはない。
- c 生薬は、薬用部位とその他の部位、又は類似した基原植物を取り違えると、期待する効果が得られないことがある。
- d 漢方処方製剤は、用法用量において適用年齢の下限が設けられていない場合、生後 3 ヶ月未満の乳児にも使用することができる。

- 1 (a、 b) 2 (a、 c) 3 (b、 d) 4 (c、 d)

問 57

生薬成分に関する記述について、正しいものはどれか。

- 1 ボウフウは、キンポウゲ科のハナトリカブト又はオクトリカブトの塊根を減毒加工して製したものを基原とする生薬であり、心筋の収縮力を高めて血液循環を改善する作用を持つ。
- 2 サイコは、セリ科のミシマサイコの果実を基原とする生薬で、抗炎症、鎮痛等の作用を期待して用いられる。
- 3 カッコンは、マメ科のクズの周皮を取り除いた根を基原とする生薬で、解熱、鎮^{けい}瘧等の作用を期待して用いられる。
- 4 レンギョウは、サルノコシカケ科のマツホドの菌核で、通例、外層をほとんど除いたものを基原とする生薬で、利尿、健胃、鎮静等の作用を期待して用いられる。

問 58

殺菌消毒成分に関する記述の正誤について、正しい組み合わせはどれか。

- a イソプロパノールは、粘膜刺激性があり、粘膜面や目の周り、傷がある部分への使用は避けることとされている。
- b クレゾール石^{けん}鹼液は、結核菌を含む一般細菌類、真菌類、ウイルスに対して比較的広い殺菌消毒作用を示す。
- c クロルヘキシジングルコン酸塩は、一般細菌類、真菌類、ウイルスに対して比較的広い殺菌消毒作用を示すが、結核菌に対する殺菌消毒作用はない。
- d ポリアルキルポリアミノエチルグリシン塩酸塩は、クレゾール石^{けん}鹼液と同様の殺菌消毒作用を示す。

	a	b	c	d
1	正	誤	誤	正
2	誤	正	誤	誤
3	正	誤	正	誤
4	誤	正	誤	正
5	誤	誤	正	誤

問 59

第 1 欄の記述は、殺虫成分に関するものである。該当する殺虫成分は第 2 欄のどれか。

第 1 欄

有機リン系殺虫成分と同様にアセチルコリンエステラーゼの阻害によって殺虫作用を示すが、有機リン系殺虫成分と異なり、アセチルコリンエステラーゼとの結合は可逆的である。ピレスロイド系殺虫成分に抵抗性を示す害虫の駆除に用いられる。一般に有機リン系殺虫成分に比べて毒性は低いが、高濃度又は多量に暴露して呼吸困難等の症状が出た場合には、医師の診療を受けるなどの対応が必要である。

第 2 欄

- 1 メトキサジアゾン
- 2 ダイアジノン
- 3 メトプレン
- 4 ディート
- 5 フェノトリン

問 60

一般用検査薬に関する記述のうち、正しいものの組み合わせはどれか。

- a 尿糖・尿タンパク検査薬は、尿中の糖やタンパク質の有無を調べるものであり、その結果をもって直ちに疾患の有無や種類を判別することはできない。
- b 尿タンパク検査の場合、原則として食後 2～3 時間を目安に採尿を行う。
- c 妊娠検査薬は、尿中のヒト絨毛性性腺刺激ホルモン (hCG) の有無を調べるものであり、月経予定日の概ね 1 週間前の検査が推奨されている。
- d 経口避妊薬や更年期障害治療薬などのホルモン剤を使用している人では、妊娠していなくても尿中 hCG が検出されることがある。

- 1 (a, c) 2 (b, c) 3 (b, d) 4 (a, d)